

菅波 茂さん

すがなみ しげるさん

昭和21年、広島生まれ。
岡山大学医学部、同医学部大学院
卒業。医学博士、東洋医学専門医。
岡山県下各保健所、病院に勤務の
後、昭和56年タイ難民のカンボ
ジア難民キャンプ視察を皮切りに、
中東、アジア、アフリカ等、世界
をまたにかけた救援医療活動をボ
ランティアとして推進。昭和55
年アジア医学生国際会議を経て、
59年にAMDAを設立。平成3年
にはAMDA国際医療情報センタ
ーを設立、インド、ネパールの農
村の巡回医療や簡易診療所の設立
にあたる。阪神大震災、ルワンダ、
サハラなど最近の活動ぶりはま
だ耳に新しい。

思いやりの心は 世界共通

ボランティア活動の
現場から

先の阪神大震災でいち早く現地入りし、救援活動に大きな貢献を果たした医療ボランティア団体「AMDA」。ボランティア活動は、「人間として放っておけない、なにかをしたい」という心の奥底からの衝動が出発点、と話すAMDA代表・菅波茂さん。民族、宗教、文化の違いを認めながら、この人類共通の思いを行動に現すことで、今日の国際社会の課題である「多様性の共存」も可能になるはずと語る菅波さんに、ボランティア活動の実践についてお聞きしました。

●日頃、国際医療団として世界各地で活動されているわけですが、阪神大震災のときはどういった活動をされたのですか。

菅波 私たちAMDAは、地震のあった一月十七日に、本部のある岡山から、医師、看護婦、薬剤師を派遣し、神戸市長田保健所を拠点に避難所への巡回医療を始めました。

薬がなくなるとの連絡があつて、十八、十九日には、大阪へチャーター機で空輸しました。そのほか、ヘリコプター、船、考えられるあらゆる手段を使って薬と救護物資を運びました。ルワンダ難民キャンプのあるゴマで、通信衛星を使う電話システムを持ち込んだり、チャーター機を雇った経験が役立ちました。

緊急救援活動の原則は、活動拠点、通信、輸送のすみやかな確保にあります。これは、AMDAの海外における緊急救援活動の経験から得たものです。その上で、後方支援態勢を整え、余つてもいいから人と物をどんどんつぎ込まねばなりません。緊急救援では、余ることはありません。不足する状況はさげなければなりません。そうしなければ、現場に派遣されたボランティアも被災者と共に

不幸な結果となってしまいます。

●この震災では、日本各地から多くのボランティアが参加しましたが、海外からも数多くの救援・支援の申し出がありましたね。金光教でも、日頃、教育援助をしているタイのラムの子供たちが、義援金を送ってきてくれました。

菅波 ボランティア活動の源泉はヒューマニズム（人道援助）です。「人間として放っておけない。何かをしたい」という心の奥からの衝動が第一歩です。世界各国から温かい支援のメッセージがあつたことを考えてみると、そのことがよくわかると思います。

なかでも、日本が経済大国の義務として援助を実施していた国々からの支援のメッセージは、特に印象深いものでした。フィリピンのラモス大統領の、一か月分の給料の寄付申し込みは、誰にでもわかりやすい明確な人道援助のシグナルでした。放つてはおけない他人の状況が出現したときには、間髪を入れず人道的な行為をおこなうことの意味合いは大きいと思います。援助の内容よりは、思いやりの心を伝えるタイミングが

各国から集まるAMDAのメンバーも宗教的、文化的背景は一人ひとり様々。 しかし、人道援助においては医師として何をすべきかが全てに優先します。

大切なのです。

「ヒューマニズムとは、必要とされる場所に参加して、汗をかくこと」というのが、国際社会の常識になっています。海外医療チームの参加申し出がAMDAにもありました。彼らの受け入れに要する人と時間を、日本人医師と看護婦の受け入れに使いたいという思いもあったのですが、「ヒューマニズムは参加である」との原則に則って、可能な限り受け付けました。多い日には、一日百二十人のボランティア医師が神戸で診療にあたりました。協力して頂いたのは、事務も含めて約千四百人。なかには、ボランティア登録してもらいながら、出動の機会がないまま終わった人もいたほど、大勢の人が申し出てくれました。

●緊急救援活動は一月という長期にわたったそうです。

菅波 継続的な活動を進めていく上で、今回の震災で、唯一地元から幅広い後方支援活動を受けることができたのはAMDAでした。

例えば、日頃交流している地元のシルバークommunityのメンバーが、救援物資などの仕分け、遠来のボランティアの接待を行ってくれました。また、婦人会のみなさんが、AMDAボランティアスタッフのための食事を地区ごとに当番を決めて作り、その食材を農協が無料で提供してくださったという具合です。

AMDAでは普段から、本部のある岡山県を中心に、政治、宗教の別なく、地方団体、民間団体等、地域の様々な団体や住民組織と相互交流を深めています。互いに知り合っているのが、地元と協力しての支援体制が作りやすかったのだと思います。

しかし、日本の一般のNGOは、非政治、非宗教を原則とし、本部も、たいてい大都市にあります。地元や地域での、市民生活に根ざした組織や団体との関係が薄いのが現状です。組織や団体に頼らず、個々人の人権

意識をもとに活動しているの、今回のようないざという時、地元の後方支援を受けにくいのではないかと思います。

今回、救援活動において、共に汗を流したことで、地域の方との関係がより深まりました。日頃から、交流し、信頼関係を築いていることの大切さを改めて思います。

●ところで、これほど多くの日本人がボランティア活動に参加したのは、今までなかったように思うのですが。菅波 たしかにこの震災では、日本中の誰もが何かしたい、という気持ちになりました。それは、被害がけた外れに大きかったからだけだとは思えません。それは、神戸に親類や友達がいるとか、旅行で訪れたことがあるとか、何らかの意味で神戸に関わりのある人が多かったから、つまり、「知らない土地ではなかった」からこそではないでしょうか。

●日本人にとっては、知っているかいないかが、行動を起こすときの重要な価値判断ということですね。

菅波 お互いに知り合っている身内や同士の助けあっていくという考え方や行動は、日本だけではなく、アジア・アフリカ地域に共通した特質です。人間関係や生活も、そのことを基盤にしています。あまり目立たないのですが、アジア・アフリカ地域には大小さまざまなNGOがあり、地域の生活向上のためにがんばっています。その活動理念も「身内同士が互いに助けあっていく」ということなのです。

いわば「困ったときはお互いさまで」でも言えはいいでしょうか。そのような考え方のものでは、援助する側―される側という関係が固定することもないし、日本人をはじめアジア及びアフリカ地域では、感覚的に受け入れやすいのです。

特に、アジア・アフリカ地域の一人として、日本人のNGOは、「困

ったときはお互いさま」という考え方を基本に、共に汗を流すことで、相互理解と相互信頼を強めていくことができます。さらに、それを応用して、世界中に身内をどんどん増やしていけばいいのです。

●金光教では、「困っている人にかたしてあげたい」という思いやりの心を神心と言っています。そして、そうした神心を素直に行動に現していく信心の実践として、社会奉仕活動に取り組んでいます。先生のお話を聞いて、改めて、身近なところで、普段から、よい人間関係づくりを心がけていくことの大切さを思わされました。また、NGO活動も、金光教平和活動センターを中心に、だんだんに取り組みも進めています。言葉や文化や宗教の違いを越えて、積極的に人的交流を進め、「知り合い」「身内」「友人」を作っていくことの大切さも教えていただいたように思います。

菅波 現在の国際社会では、民族、宗教、文化の違いを認めあいながら、共存、共榮していくこと、すなわち「多様性の共存」が課題になっています。

各国から集まるAMDAの参加メンバーも、一人ひとり様々な宗教的、文化的背景を持っています。めいめいお祈りの仕方も食習慣も、得意な医療分野も違います。しかし、人道援助活動においては、医師として何をすべきかということを中心に優先させ、協力し合っ活動を進めます。

人に対する親切や思いやりの心は、万国に共通する価値ですが、それを行動に現していくときには、一つの宗教や文化に基づいたやり方を基準にするのではなく、多様性を認めあいながら、「人間として放っておけない。何かをしたい」という、共通の目標に向かって、みんなで努力していけばよいのです。

●AMDAは平成7年三木記念助成金(岡山県とトロスガリ賞(国連支援交流財団)を受賞しました。